

精緻にして しなやかな感性

加藤二郎先生を送る

大 場 恒 明

組織が定めた別れの季節はいやおうなくめぐってくるけれども、精神の世界に定年はない。ムージルとともに人知と感性の領域をたゆみない足どりで極めてこられた加藤二郎先生に、この粗粗しいことは似合わない。

先生はまことに精神の人である。こう申しあげたら、先生はさぞかし顔をしかめられることだろう。出来合のことはでくった言い方をなによりも嫌われる人だからである。ざらざらした俗事にひそむ人の心のうすよごれた襷を瞬時に見抜く透徹した眼と、いつわりの声が発する不協和音を鋭敏に聞き分ける聴覚を通して、先生はご自分の言動を峻厳に律する原理を定めておられるように思われる。美醜に対する感性と善悪に対する倫理感とのかくも見事な一致は、先生をムージルに傾倒させ、またムージルの世界との共振のなかでいつそうゆるぎないものになったのではなからうか。ストイックなまでにご自身の感性に誠実であらうとする先生は、その限りにおいてきわめて頑固であるが、しかしまた、その感性のなん

としなやかであることか。先生の大偉業『特性のない男』はそれを証して間断するところがない。この宇宙大ともいうべき小説世界を構築している原作者の片言隻句も、先生の精緻な精神の動きと共鳴していないものはない。ムージルの晦渋な想念も先生の若竹のような文体にからめとられ躍動し生き返る。これはまさしくムージルの世界であり、また、まぎれもなく加藤二郎先生の世界である。第一巻の「あとがき」で、先生は『特性のない男』の「夏の日の息吹」の一節にふれて、「訳者はこの一節を目指しそれを訳したために、この長い長いトンネル工事を続けたといっても過言ではない」と書いておられる。私はこれを読んで激しく心を打たれた。少しの乱れもなく弛緩もないご訳業を前にして、先生の精神の営みの迫力に圧倒され、怠惰な心はただただ気が遠くなる思いをするばかりである。

はからずも同僚の一人として、先生とともに過ごしたこの六年間、先生がなおも彫琢の手を加えられ仕上げの

仕事にかかっておられるご様子を、たびたび伺うことができたことは得がたい幸福であつたとつくづく思う。ご苦心もあつただろうが、先生はいつも楽しそうに悠々としておられた。

加藤二郎先生とはじめてお会いしたのは、平塚キャンパス設立直前に、横浜の東急ホテルで行なわれた新任予定者顔合わせの会だつた。それ以前に、前理学部長の藤原鎮男先生から、ドイツ語では加藤二郎先生が就任なさると伺つて、高名なムーヅル学者と同僚になる光栄の喜び以上に、正直なところ、粗野なわが身をかえりみて不安な思いもないわけではなかつた。初顔合わせだといふのに三〇分以上も遅参して、加藤先生の隣に用意されていた席に小さくなつて座つた私に、「加藤です。いっしょにやりましょう」と先生は声をかけてくださった。

先生はシャイである。あえて不遜な言い方をすれば、つねに謙虚である。文学に関する仰ぎみるほどの学識はいうに及ばぬことだが、芸術の諸般に精通されていないながら、それをみずから口にされることはない。先生がご自分でフルートを演奏され、絵を描かれ、篆刻をよくなさるのを知つたのは、加藤先生のお宅にたびたび伺うようになつてしばらくしてからだつた。そんな時でも、ご自分の美に対する深い愛を語つて野蠻な無学者を恥じ入らせまいという優しいお心づかいからであろうが、先生は

まるでにかむように、音楽や絵画の話をぼつぼつとしてくだけるだけである。先生の前では、「文化」とか「教養」とかいふことが、なんと色あせてしまうことか。先生のなかにあるのは、今は少なくなつた本物の「文人」の心だ。これが先生の謙虚さの真髄である。真の権威というものであらう。

押しつけの「権威」に向かつては、やみくもに螻蛄の斧を振り回したくなるくせに、本物の優しい謙虚さに対しては、すぐ図に乗つて傍若無人に振る舞う愚かな小人のならいで、私は加藤先生にはずいぶんと不快な思いをさせてきたにちがいない。先生は昨今こそ体調がすぐれないこともあつて酒席をとにもすることが少なくなつてしまつたが、以前はよく学部の教員たちと杯を傾けられた。先生は若い教員たちがお好きで、とりとめのない醉談に楽しそうに付き合われた。決して若くない私が尻馬に乗つて酔態を呈するのを見て、あきれられたことも一度や二度ではなかつただろう。平塚などで酔いつぶれた私をお宅までタクシーで連れていかれて泊めてくださったことが何度あつたことだろう。ある時、車のなかで酔眼もうろうとしている私をつくづくご覧になつたあとで、深夜の闇に目をやつて、ため息をつくように「あなたはフランス文学をやっている人のようには見えないね」とおっしゃつた先生の声には、非難や憐愍ではない、深い

悲しみのような響きがあった。先生の優しさが身にしみた。いっそう先生に親近感を覚え、奥様とともに暖かく迎えてくださるご好意にたびたび甘えることになった。

先生はまた「少年の心」を失わずにいる類まれな方である。冬が近づくと先生は手作りの凧の手入れを始められる。年末年始は上昇気流を求めて酒匂川の河川敷を駆けめぐる。奥様がそれを手伝われる。残念ながら、この情景をまだ拝見したことはないが、尾を引き風に逆らいつつそれに乗り、かすかな唸りを発して、まるで天翔ける先生の心のように上昇する凧を見上げている先生と奥様のお姿がまぶたに浮かぶ。

溪流釣りと花鳥草木に寄せられる好みも先生の繊細な美意識に発するものなのであろう。お宅の近くを流れる川での山女やます釣り、時には深山の溪流をたずねての岩魚釣りなどの釣果を話される先生の眼は清流のように澄んでいる。この時ばかりは少年のように誇らしげである。溪流魚のしなやかな魚体や精緻な仕掛けが先生の感性と一体化して、先生は至福の世界との合一をはたされるのであろう。まだ一度しか連れて行っていただいたことがないが、これからは、溪流釣りのご指南もいただけることを楽しみにしている。

学生に対するドイツ語の指導も、そのきめ細かさにおいて徹底しておられる。多数の受講者に、常時、添削指

導をほどこし、大学院受験希望者には時間外の個別指導をなさるなど、ご自分の研究や訳業にあたられるのと同じく、手を抜かれることがない。昨年あたりから入院されたり通院加療されたりで体調が万全でなく、階段の上り下りが難儀そうにお見受けする状態でも休講しようとはなさらない。教育に対する情熱を少しも失っていない先生を「定年」という制度的区切りによって、このキャンパスから送らざるを得ない。惜別の念はやみがたく、空白は限りなく大きい。

先生は、長年の教育から解放され、これからは、最近入手された『特性のない男』のCD-ROMを駆使してテキスト照合に専念され、また新たな発見を求める日々を迎えられることであらうと拝察している。

学恩に深く感謝申しあげる。